

四旬節第一主日 2014.3.9

荒野の出来事

マタイ福音書 4章 1-11 節

4:1 さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒野に行かれた。

4:2 そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。

4:3 すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」

4:4 イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』／と書いてある。」

4:5 次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、

4:6 言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、／あなたの足が石に打ち当たることのないように、／天使たちは手であなたを支える』／と書いてある。」

4:7 イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。

4:8 更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、

4:9 「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。

4:10 すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、／ただ主に仕えよ』／と書いてある。」

4:11 そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

説教

毎年四旬節の第一主日にはイエスの宣教活動直前の荒野の出来事が朗読されます。この出来事は事実というより、いわゆる聖者伝説でしょう。福音記者は伝承をもとにこの記事を書いたおもわれます。記事には伝えたい事、目的

があるはずです。イエスさまは断食してフラフラになっているところ、悪魔と闘い誘惑を退けました、という物語を伝えるだけ、ということではないはず。きょうのテキストは悪魔の三つの問いとイエスの答えという構成になっています。

1)神の子ならこの石をパンに変えてみよ

→人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きるものである

2)神の子ならここから飛び降りてみよ →神を試みてはならない

3)ひれ伏してわたしを拝むなら、すべてをあなたに与えよう

→主なるあなたの神を拝し、ただ神のみに仕えよ

第一から第三の問いはそれぞれ「富、奇跡、権力」に対応しているという解釈があります。石をパンに変える力をつかえば、この世の飢餓、飢え渴き、は解消されます。奇跡を目の当たりにすれば不信仰な人々も信じます。世界を掌握する権力があればイエスの理想、神の国の実現は容易になります。しかしイエスはそれをいずれも退けました。なぜか？

荒野の出来事を宣教開始直前においた意味はイエスの所信表明だから、とするとひとつの答えになりそうです。ここで「富、奇跡、権力」に頼らない宣教を行うとイエスは表明したことになります。それはこの後に続くイエスの福音を読み進めれば明らかです。イエスは貧しい人たちによりそい、神殿権力・ファリサイ派権力と戦いました。奇跡は行いますがしばしば目撃者には口止めをしています。

ところで、「富、奇跡、権力」を頼りにすれば現実の教会活動はとんとん拍子に進めることができそうです。この三拍子さえあれば、せめて一つでもあればと願う人は多いのではないのでしょうか。仮に、末期がんの患者が癒されるという奇跡が今どこかの教会で起きたとします、その教会には人々が殺到するでしょう。人々の救いのため、多くの人に福音を届けるためにとても効果的な方法です。でも、これはちょっとおかしいぞとを感じる。なんかペテン

にかけているような気がします。

「カラマーゾフの兄弟」（ドフトエフスキー著）のなかに大審問官という箇所があります。そこでこの荒野の出来事、イエスと悪魔の問答がテーマとなっています。小説の中でドフトエフスキーは「世界中の智慧を一束ねにしてみたところで、力と深みにおいて、この三つの問いに匹敵するようなものは考え出せない」とこの問いを重視し、小説をとおして読者にするどく問いかけます。

ドフトエフスキーは3つの問いを「神秘、奇跡、教勢」と捉え小説の中で展開します。「神秘」とは地上のパンに対する天上のパンです。「奇跡」は病氣直しもふくめた超自然的な力です。「教勢」とは教会の勢力、世の中に対する現実的な力、権力をさしています。

イエスは地上のパンを拒否します。そして「神のことば」の優位を説きます。わたしたちが礼拝時に聖餐でいただくパンは天上のパンの象徴です。それはパンであってパンでないもの、イエスが「人はパンのみに生きるにあらず」といった象徴的なパンをわたしたちは毎週拝領しています。「パンのみに生きるにあらず」を拝領儀礼を通して実践している構造です。これはこれでいいことです。しかし聖餐は2000年間途切れることなく世界中で行われています。それでなにかが変わったのか、変わってきているか。世界には飢餓に苦しむ人々がいます。その人たちに食料を届ける活動があります、しかし飢えは癒されない、状況はいっこうに変わらない。それじゃパンのかわりに聖書でも送ればいいのか、そうすれば飢えは終わるのか。

ヤコブは行いの伴わない信仰を諫めました。

もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだれかが、彼らに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。

（ヤコブの手紙 2:15-16）

この教えはイエスの返答の裏返しのことばになっています。あえて書けば

「人はみことばだけで生きるのではない、日々のパンによって生きる」でしょうか。一方でパウロはこのように言います。

「働きたくない者は、食べてはならない」(第二テサ 3:10)

このパウロのことばを重く受け止め、沈思し、労働手段・生産方法の援助をおこなう有志もいます。

この問いには、現世の大いなる秘密が隠されているのだ。『パン』を受け入れたなら、おまえは、個々の人間のみならず、全人類がかかえる万人共通の永遠の悩みに答えることができたはずだ。つまり『だれにひざまずくべきか?』という悩みだ。(カラマゾフの兄弟から)

イエスが石をパンに変えてみせれば、食を保証するものとしてイエスは支配者となることができました。「主なるあなたの神を拝し、ただ神のみに仕えよ」これはイエスの第三の答えですが、これが実現できたはずだろうと言います。イエスはこれを拒否したため、支配されたいという万人共通の永遠の悩みを解決できなかった。その根本には人間というものは、ひざまずくべき相手をつねに求めている存在だと考えがあるようです。これはイエスの考えともある点では一致しています。ただイエスは信仰を自律として、個人の自由な意思で、行うことを求めました。それゆえに天上のパンを目標として提示しています。小説の中でいわれている「現世の大いなる秘密」とは支配・被支配、支配する側、支配される側という問題でありイエスが天上のパンというならば、われわれは地上のパンを与える。それはつまり「誰にひざまずくべきか」にイエスとは別の回答であり文字通り悪魔の回答です。

ドフトエフスキーが投げかけたこの問いは人類にとっておもく重要な問いです。多くの文学者、思想家、哲学者がこの問いにさまざまな形を通して取り組んでいます。また教会の内部にも取り組みはあります。荒野の出来事を誘惑物語、悪魔に打ち勝ったイエス物語として読むだけでなく、「神秘・奇跡・教勢」「富・権威・権力」の問題として真剣に考え続けていく、向き合っていくことが大切で必要です。